

学位請求論文審査報告要旨

2019 年 2 月 13 日

学位請求者 古川 敦子

論文題目 外国につながりをもつ児童生徒の教育実践の意義
－日本語指導を担当した教員の学び－

論文審査委員 イ ヨンスク

西谷 まり

石黒 圭

1. 本論文の構成

言語教育は、生きた社会の現実と深い関わりをもつ分野である。このことは日本語教育にも当てはまる。日本では、1990 年代以降、定住する外国籍住民が増加しており、外国籍住民のあり方も多様化してきている。本論文の目的は、このような日本社会を念頭におきながら「外国につながりをもつ児童生徒」への教育実践が教員や学校教育にもたらす意義について考察することである。「外国につながりをもつ児童生徒」とは、国籍や出生・生育地を問わず、日本以外の文化的背景、日本語以外の言語的背景を持つ児童生徒のうち、とくに小中学校の学齢期の子どもを指す。本論文は、800 人以上の現職教員を対象に量的調査を行うとともに、PAC 分析による質的調査を行い、日本語指導を担当した教員の意識の変容と学びを究明した労作である。

論文の構成は以下の通りである。

第 1 章 外国につながりをもつ児童生徒の受け入れの背景と課題

1-1 本研究の背景と目的

1-2 外国につながりをもつ児童生徒教育の現状と課題

1-2-1 日本語指導の課題と教員に求められる役割

1-2-2 学校内の日本語指導体制に関する課題

1-2-3 日本語指導を担当する教員の課題

1-3 日本語指導担当教員の実践的知識を研究する意義

1-4 本研究の目的

1.5 本論文の構成

第 2 章 外国につながりをもつ児童生徒に対する諸施策

2-1 「日本語指導が必要な児童生徒」の受け入れ状況

2-2 外国につながりをもつ児童生徒に対する教育支援

2-2-1 文部科学省による支援の検討

2-2-2 就学支援および学習支援の資料の提供

2-3 日本語指導の「特別の教育課程」

2-4 外国につながりをもつ児童生徒を担当する教員を対象とした研修

第3章 理論的背景

3-1 「学び」をどのように捉えるか

3-1-1 構成主義の学習理論

3-1-2 活動理論 –活動システムと拡張的学習サイクルー

3-2 教師の「実践的知識」研究

3-2-1 教育における理論と実践の関係

3-2-2 教師の実践的知識に関する研究

3-2-3 実践的知識の「全体性」

第4章 外国につながりをもつ児童生徒に対する学校教員の視点

4-1 調査概要 –外国人集住地域の小中学校教員に対する質問紙調査–

4-2 外国人児童生徒への対応において教員が感じる困難

4-2-1 学級担任・教科担当として感じる困難

4-2-2 日本語の個別指導で感じる困難

4-3 外国人児童生徒受け入れの意義

4-3-1 学級担任・教科担当として感じる意義

4-3-2 日本語の個別指導で感じる意義

4-4 小中学校教員対象の質問紙調査のまとめ

第5章 日本語指導を担当した教員の実践的知識

5-1 日本語指導の実際 –小学校の日本語支援教室の指導–

5-1-1 調査概要

5-1-2 日本語指導の過程 –指導計画に基づく実践・評価・振り返り–

5-1-3 日本語指導過程の調査の考察

5-2 日本語指導を経験した教員の実践的知識（1） – 教歴2年の教員Tの事例 –

5-2-1 調査方法 –PAC分析調査–

5-2-2 調査の手続き

5-2-3 第1回調査のデンドログラムの解釈

5-2-4 第2回調査のデンドログラムの解釈

5-2-5 教員Tが日本語指導を通して得た学びについての考察

5-3 日本語指導を経験した教員の実践的知識（2） –教歴20年以上・日本語指導2年以上の教員WとYの事例–

5-3-1 調査協力者

5-3-2 調査方法と手続き –PAC分析調査–

5-3-3 Wのデンドログラムの解釈

5-3-4 Yのデンドログラムの解釈

5-3-5 教員WとYが日本語指導を通して得た学びについての考察

第6章 外国につながりをもつ児童生徒教育に携わる教員の組織的取り組み－教員の研究グループ「日本語教育研究班」の活動を事例として－

6-1 群馬県伊勢崎市の「日本語教育研究班」

6-1-1 伊勢崎市における外国人児童生徒教育

6-1-2 教員の研究グループ「日本語教育研究班」概要

6-1-3 研究班の活動（平成25年度～平成28年度）

6-2 研究班活動で作成された指導ツール

6-2-1 ①「日本語ステップ」－子どものことばの力を見取る共通指標－

6-2-2 ②「個別の指導計画 様式1・2（伊勢崎版）」

6-2-3 日本語初期指導プログラム

6-3 研究班活動を通して得られた教員の学び

6-3-1 インタビュー調査概要

6-3-2 分析方法

6-3-3 分析結果－各教員のストーリーライン－

6-3-4 研究班活動を通して得られた教員の学び

6-3-5 研究班に参加した教員の指導観の変容

第7章 総合的考察

7-1 本研究で実施した調査の結果

7-1-1 第4章 外国につながりをもつ児童生徒に対する学校教員の視点 まとめ

7-1-2 第5章 日本語指導を担当した教員の実践的知識 まとめ

7-1-3 第6章 外国につながりをもつ児童生徒教育に携わる教員の組織的取り組み まとめ

7-2 教員の日本語指導活動のサイクル

7-2-1 教員Tの日本語指導活動の分析

7-2-2 日本語教育研究班の活動の分析

7-3 日本語指導を担当した教員の学びに関する考察

7-3-1 児童生徒の言語的・文化的背景を捉える視点－教員にとっての多文化教育－

7-3-2 「日本語指導」の領域の脱固定化

7-3-3 外国につながりをもつ児童生徒の包摂を前提とした指導への転換

7-4 本研究の課題

参考文献

添付資料

2. 本論文の概要

本論文は7章で構成される。第1章では最初に本研究の概要を述べ、研究の背景として今日の外国につながりをもつ児童生徒、および日本語指導に関する課題と、これまで年少者日本語教育

の分野で論じられてきた教員の課題について整理する。そして「教師」の専門性である実践的知識を研究する意義と、本研究の目的を説明する。

第2章では、これまで、国内の学校教育における外国につながりをもつ児童生徒の教育の変遷を記述する。日本語指導が必要な児童生徒とその指導の現状、文部科学省による外国につながりをもつ児童生徒への施策、日本語指導の「特別の教育課程」制度、日本語指導に関する教員研修の内容や研修で育成する教員の資質や力量を中心に概観する。

第3章では、まず本研究で取り上げる教師の学びに関する理論的背景と、調査の分析の枠組みについて記述する。本研究が全体として依拠するのは構成主義の学習理論であり、「学習」を「知識を記憶すること」ではなく、学習者自身が学習活動に参加し、学習過程において知識を構築していく過程と捉える。つまり、教師は実践現場や学習者との関係性から学びを形成していくという立場をとる。また、後述する日本語指導の活動とその展開を分析するための枠組みとして、ヴィゴツキーに始まる活動理論を説明し、エンゲストローム（1999）の活動システム、拡張的学習サイクルのモデル図を示す。そして、教育の理論と実践の関係について、これまでの先行研究を概観し、教師の実践的知識の特徴について記述する。

第4章から第6章まで、3つの異なる観点から教員に対する調査を行う。本研究で用いる研究方法と概略、調査対象者やデータの収集方法等の詳細は各章で述べる。

第4章では、ある地域の小中学校教員を対象に、外国につながりをもつ児童生徒の教育に関する質問紙調査を行い、記述回答で得られた事例から、指導の困難さと受け入れの意義について、在籍学級で指導する教員と日本語指導担当教員に分けて分析した。在籍学級での指導に関わる教員にとっては、学校生活と、その基盤となる在籍学級での活動への外国人児童生徒の参加度合の低さが「課題」として捉えられているが、学校への円滑な受け入れ、児童生徒の学習活動への参加、児童生徒同士の交流や関係性の広がり等に関する知見の例が多く挙げられ、指導を経験したことから教員が新しい知見を得て、意義を感じていることが示された。日本語指導担当者からは、日本語教室の運営、日本語の体系的な指導方法、学級担任等を含む他の教員との連携体制の必要性などが課題であり、個別指導の困難の要因として挙げられたが、教員が児童生徒の日本語力の伸び、コミュニケーション力の向上をより細かく捉えていることが示された。

第5章では、日本語指導に携わる教員の実践的知識を明らかにするために、3人の教員に対して調査を行った。まず、教職2年目で初めて日本語指導を担当した教員1名を対象に、取り出し指導における日本語指導について、対象となる児童の指導計画の作成から実践、見直しや検討の過程を調査した。次にPAC（Personal Attitude Construct：個人別態度構造）分析調査を2回実施し、教員個人の日本語指導に関するイメージ構造を比較して、日本語指導の実践経験から得られた学びを分析した。また、日本語指導を複数年経験した、教職20年以上の教員2名に対してもPAC分析調査を行い、日本語指導の経験を積むことによって得られた実践的知識とその構造を明らかにし、その知識が現在の授業実践にどのように影響しているかについても考察した。

第6章は、外国人集住地域である群馬県伊勢崎市で発足した日本語指導を担当する教員による研究グループ（日本語教育研究班）の5年間の活動と、その活動で作成した3つの指導ツール、児童生徒の日本語の力を把握する共通指標「日本語ステップ」、児童生徒の日本語指導の「個別の指導計画 様式1・様式2（伊勢崎版）」、伊勢崎市の初期対応時に使用する「日本語初期指導プロ

グラム」について説明する。そして研究班の教員へのインタビュー調査の回答を質的に分析し、日本語教育研究班の活動を通じて教員が「日本語指導に関する知識・情報の習得」「視野の広がり・実践への意欲」「互恵的な学びの関係性構築」「指導の組織化・連携の働きかけ」という学びを得たことを示した。また、外国につながりをもつ児童生徒の教育の捉え方の変容を「日本語指導の『固定化』『閉鎖性』の気づき」と「他の児童生徒へのプラスの影響」とまとめ、教員の発話例とともに示した。

第7章では、まず第5章で調査した教員1名と第6章で調査をした日本語教育研究班の日本語指導の活動をエンゲストローム（1999）の活動システムに基づいて分析し、解釈を加えて図示した。そして、日本語指導活動の過程と教員の学びを拡張的学習サイクルに当てはめて、日本語指導活動がどのように転換していったかを示した。そして第4章から第6章までの調査で得られた結果を総合して、外国につながりをもつ児童生徒への日本語指導から得られる教員の実践的知識について「児童生徒の言語的・文化的背景を捉える視点」「日本語指導の領域の脱固定化」「外国につながりをもつ児童生徒の包摂を前提とした指導への転換」の3点から考察した。本論文の調査から教員が日本語指導を通して適応のための教育や補償としての言語的支援という領域を越え、学校全体で多文化・多言語社会、多様な背景を持つ子どもに対応できる学校教育を目指すという意識へ変容したことが示された。

今後は、このような教員の実践的知識が実際の指導でどのように機能するのか、そして教員の意識の変容が学校の指導体制にどのような転換をもたらすのかについて研究を進め、多言語・多文化化する学校教育の基盤となるような教育実践についても取り組んでいきたいと著者は論じる。

3. 本論文の成果と課題

本論文の成果は以下の点にある。

第一に、これまで外国人児童・生徒に関する研究は、外国人児童・生徒そのものを研究対象にしたものが多いが、こうした中で、本論文は日本語指導を担当した教員に焦点をあてた点に特色がある。具体的には、①教員の現場の教育実践とその課題を明らかにしている、②教育実践の背後にある教員の意識とその変容を浮き彫りにしている、③多言語・多文化的視座の獲得が教員の成長につながることを適切に指摘している、④日本語指導をめぐる教員の自主的・創造的な「学び」を重視しているという4点で先行研究を凌駕しており、高い独創性を有している。本論文は、これまでの外国人児童生徒の日本語教育のあり方、すなわち足りない知識や情報を補い、いかに効率よく日本語を習得させるかに注目したのではなく、教員も現場の実践からさまざまなことを学び、そのなかで教員の意識がどのように変容していたかを明らかにしたものであり、その意味で本論文は、日本語教育研究の欠落部分を埋めるだけでなく、学校教育という既存の価値体系に新しい視点と可能性を提示し得ている。この点は高く評価できる。

第二に、量的調査と質的調査を丹念に行っている点である。特定地域において、800名以上の現職教員を対象に量的調査を行い、学級担任として困難を感じる事例及び嬉しさを感じる事例を

幅広く収集しており、自由記述からは現場で経験する生の声が浮かび上がってくる。また、新人教師とベテラン教師を対象とした PAC 分析による質的調査では、外国人児童を指導して感じたこと、自らの配慮について、豊かな言葉を引き出し、教員がこれまでに培ってきたものを基盤としながら、新たに豊かな実践的知識を形成していることを明らかにしている。さらに、「日本語研究班」を調査対象として、教員個人のみならず、教員集団の学びにも深く切り込んだことも本論文の大きな功績といえる。

第三に、用いられている調査手法が堅実であり、質問紙調査の回収率が驚くほど高い点、PAC 分析により拾い出した項目が広範囲に亘る点である。いずれを見ても、本論文の筆者が調査協力者と良好な信頼関係を築き、慎重に調査を進めている様子が見て取れ、フィールドワーカーとしての筆者の高い力量を感じさせる。

しかし、本論文には以下の弱点もある。

まず、著者の慎重な調査姿勢の裏返しとして、調査に対する踏み込みの弱さを感じられた。アンケート調査からは、教員が感じる困難点として、児童・生徒に対する学習指導の面だけでなく、保護者への対応があることが示唆されている。しかしながら、記述の中心は学習指導に置かれ、児童・生徒を背後で支える保護者がどのような困難を抱えているかについての言及がほとんどなかった点が惜しまれる。

もうひとつは、質的調査の対象者が模範的教師のみである点である。PAC 分析による質的調査の対象者は外国人児童に対して肯定的な態度と実践を行っており、また、「日本語研究班」に参加している教師も、ある意味で外国人児童に対する模範的な教師である。しかし、新人教師はもちろんのこと、ベテラン教師であっても、あるいは、ベテランであるからこそ固定感から脱却できず、現場教員としての実践知を生かせていない事例もあることが予想される。そういった教員も調査対象にできれば、さらに考察が深まるだろう。

しかし、以上の問題は著者自身もよく自覚しており、本論文の価値を損なうものではない。丹念な量的・質的調査を積み重ねたことで得られた独自のデータを明確な構成のもとで分析している本論文は、著者の優れた力量を証づける出色の日本語教育研究として認めることができる。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考ええる。

最終試験結果の要旨

2019 年 2 月 13 日

学位請求者 古川敦子

論文題目 外国につながりをもつ児童生徒の教育実践の意義
ー日本語指導を担当した教員の学びー

論文審査委員 イ ヨンスク 西谷まり 石黒 圭

2019 年 1 月 30 日、本学学位規則第 8 条第 1 項に定めるところの最終試験として、学位請求論文提出者 古川敦子氏の「外国につながりをもつ児童生徒の教育実践の意義ー日本語指導を担当した教員の学びー」博士学位請求論文に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、古川敦子氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、一橋大学博士（学術）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を古川敦子氏が有することを認定し、最終試験での合格を判定した。